

# 5人兄弟とセカイの関わ り方 夢見る少女編

エビデンス海老天むす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 人物設定

この物語は5人兄弟の一也（かずや）仁剛（にごう）愛美（あいみ）紫乃実（しのみ）  
優吾（ゆうご）が、プロジェクトセカイのキャラクターと共に歩んでいくストーリー。  
と、なつております。

この小説は紫乃実

注意！この物語はゲーム「プロジェクトセカイfeat. 初音ミク」の二次創作です。

メインストーリーの内容を含みます。ゲーム内の全てのグループと関わるのでメインストーリーを読んでおくことをオススメします。

と、言うよりメインストーリーガチで感動するので読んでくださいお願ひします。

### 前編

ニーゴ編 <https://syosetu.org/novel/289522/>  
ビビバス編 <https://syosetu.org/novel/282333/>  
レオニ編 <https://syosetu.org/novel/273753/>

# 目次

第十一話 「作戦会議」

人物設定	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第0話 「オープニング」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第一話 「憧れはいま…」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第二話 「地雷」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第三話 「諦めない」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第四話 「練習開始！」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第五話 「ファミリートーク」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第六話 「問い合わせ」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第七話 「今までありがとう」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第八話 「亀裂」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第九話 「九十九家上陸」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
第十話 「セカイと青」	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
55	51	45	39	35	29	23	18	14	9	6	1

# 人物設定

## 人物設定

この物語は5人兄弟の一也（かずや）仁剛（にこう）愛美（あいみ）紫乃実（しのみ）優吾（ゆうご）が、プロジェクトセカイのキャラクターと共に歩んでいくストーリー。と、なっています。

この小説は紫乃実

注意！この物語はゲーム「プロジェクトセカイ f e a t. 初音ミク」の二次創作です。メインストーリーの内容を含みます。ゲーム内の全てのグループと関わるのでメインストーリーを読んでおくことをオススメします。と、言うよりメインストーリーガチで感動するので読んでくださいお願いします。

本文は前回の小説の人物設定と同じ文です。ご理解ください

一也（かずや）

23才の新任教師。イケメンでなんでもできる。（告白されるが、ピンときた相手がない、未だに彼女なし）

兄弟の中では1番頼られる

宮女に勤めていて、テストの製作から雑用まで幅広く仕事をこなすスーパーマン  
家でも仕事を持ち帰つて没頭している

（作中ではレオニと関わります）

仁剛（にごう）

19才の大学生。普段は適當だが、音楽に関しては一切手を抜かない作詞作曲を一人でこなす。

兄弟の中では1番バカ

音大の1年生で音楽友達と話すためだけに大学へ進学した

音楽の才能はピカイチでバイオリンなどのクラシックからギターなどの現代楽器まで幅広く演奏できる

音楽にハマったきっかけは小学校のリコーダー、妹曰く、音が鳴るのが嬉しそぎて

1ヶ月で教科書の全ての曲を吹けるようになったと言う  
もちろん歌もプロ顔負けの歌声を、持つていて  
(作中ではビビバスと関わります)

愛実（あいみ）

紫乃実とは双子

17歳の神高に通う2年生。中学生の頃に1ヶ月間寝込んでしまい常に体が弱い。  
いつも杖を使っている。

兄弟の中では1番綺麗好き（1日ずっと掃除をしていることもある）  
通う学校が紫乃実と被るのが嫌で神高にした

（作中ではニーゴと関わります）

紫乃実（しのみ）

愛美とは双子

17歳の宮女に通う2年生。アイドル顔負けのルックスとダンス技術を持っている

兄弟の中では1番家族想い

家に一人で待つ母の手伝いの為に部活の加入を断り続けている。

一也と家族だということは面倒なことになる為普段は隠している  
(作中ではモアジャントと関わります)

優吾（ゆうご）

16歳の神高に通う高校1年生。物語を作るのが大好きで授業中、真剣にノートを  
とっていると思つたら大体物語を書いている。

兄弟の中では1番運動神経と直感が冴えている。俗にいう感覺派である。  
役者としては素人だが、持ち前のノリと勢いでなんとかなつてゐる。

(作中ではワンドーショと関わります)

麗奈（れいな）

5人兄弟の母

専業主婦でおつとりしている

怒つても怖くないが、一也の嘘で怒らせてはいけない存在となつてゐる

雄大（ゆうだい）

5人兄弟の父

世界中を飛び回ることで有名な大企業の秘書兼護衛役をしている。

本当は結婚をする予定は無かつたが、麗奈を見て一目惚れし、麗奈も一目惚れした為そのままゴールインとなつた。

週一回、家族とのビデオ電話を楽しみにしている重度のファミリーコンプレックス  
(通称スーパーファミコン)

# 第0話 「オーブニング」

私の夢はアイドルになることだつた。

でも、私はそれを言わなかつた。いや、言い出せなかつた。私が変わることでまた家族に迷惑をかけるかも知れないから。だから私はもう、変わらない。

中学生まで私は積極的な生徒だつた。私は出来ないことがあることが嫌いで、だからいろんなことを挑戦したし、納得ができるまでやり続けた。

もちろん出来なかつたこともあつたけど、挫けなかつた。だつて隣にはお姉ちゃんがいたから。一度だけ、お姉ちゃんにアイドルになりたいと言つたことがある。お姉ちゃんは驚いた様子でこう言つた。

「紫乃実いいじやん！じゃあもつと頑張ろ！私も一緒にやるから！」

お姉ちゃんは私の夢を肯定してくれた。そこらかもつと努力して2ヶ月がたち、一社だけアイドル事務所の面接まで通つた。1週間後にオーディションを控えた私にとあることが起つた。

「お姉ちゃん！大丈夫!? お姉ちゃん!! 目を覚ましてよ！ お姉ちゃん!!」

お姉ちゃんは1ヶ月、目を覚さなかつた。面接を受ける事務所には行く気にならなかつた、そんなことよりお姉ちゃんが心配だつた。

お姉ちゃんが倒れた原因は体が無理をしていたかららしい。

私が無理をさせたから。私がアイドルになるなんて言つたから。

「もう、やめよ。」

私はもう上を目指すのをやめた。私は今までの努力を平行線でやればいいや。もう、どうでもいい

現在

私は宮女に進学した。努力すれば大抵のことはできるし、なんとなく宮女に進学した。進学校らしいけど勉強が特に難しいわけじゃないし、1年過ごしただけで学校に飽きてしまつた。

けど最近は学校が面白くなつた。授業は相変わらずだけど授業後の屋上にいる時間

は楽しかつた。

「みーのーりーちやーーん」

「あー紫乃実ちゃん！ また来ててくれたの！」

「うん！今日は家の手伝いもないし、わかんないことがあつたら言つてね。」

「本当にいいの！じゃあこここのステップ教えてほしいな～」

「見せてみて、あーーーこのステップはねー

花里みのりちゃん、いつも明るく笑顔で太陽みたいな女の子、アイドルを目指して日々努力しているようだ。毎日夕方近くまでアイドルになるためレッスンをしている。たまたまみのりちゃんの練習を見た私が少し手本を見せただけですごい褒めるものだから私も調子に乗っちゃつたのかなんだかんだ今でも教えている。みのりちゃんを見ているとなんだか懐かしい感覚になつてくる。

「ねえ、紫乃実ちゃん、紫乃実ちゃんはどうして私にここまでダンスとか教えてくれるの？」

「似てるからかな」

「似てるって誰に？」

「教えるーい」

「ええーー！そんなあ～気になつちやうよ～」

そんな私たちの日常は良くも悪くも崩れ去つていつた。

# 第一話 「憧れはいま…」

宮益坂高校

屋上

「紫乃実ちやーん」

私が屋上に来るなりみのりは私に泣きそうな声で抱きついてきた。そういえば今日はみのりの50回目のオーディションの結果発表だつたつけ？

「どうしたのみのりーまたオーディション落ちちゃつたの～？」

「それもそただけど：違うのASRUNが解散して遥ちゃんが芸能界を引退しちやつたの～」

桐谷遙。国民的アイドルであり、所属しているグループASRUNの不動のセンター、でみのりの推し

そんな彼女が芸能界を引退するなんて、芸能界も大変だなあ～

「そつか～推しが引退しちやうなんて残念だつたね」

「でもでも、遥ちゃんが私に希望をくれた分だけ私もアイドルになつて希望を届けようつて思つたの！」

すげーポジティブシンキング、本当にみのりちゃんつて努力家だなあ。憧れちゃうよ。

「そつかそつか、ならアイドルになるために、今日もダンス始めよつか。」

「うん、……いつもはASRUNの曲だけど…そうだ！今日はミクちゃんの歌にしていい？可愛くて元気でるし！」

「オッケー、じゃあ……」

その時屋上の扉が開いた。こんな時間に屋上の扉が開くなんて珍しい。一体誰が……

「は、遥ちゃん！」

そこには桐谷遙がなんと宮女の制服を着ていたのだ。一個下だとは知っていたけど、まさかこの学校にいたとは…

「邪魔しちゃつたかな…えつと…」

「あ…あ…はい！1年A組出席番号21番花里みのりです。趣味はフリの完コピ！特技はキヤチフレーズをつけることです。」

「なんかオーディションみたいになつてない？あ！そうだ。

「じゃあ自分にキヤツチフレーズをつけてみて、」

「えつ、えつ？あ、アイドル界のコタツになりたい、花里みのりです！」

私はみのりに対して無茶振りをしてみる。

「え？」

「うーん、ダメ！ダサいし、よく分からない。」

「そ、そんなあ。辛口だよ紫乃実ちゃん」

「ごめんね、桐谷遙さん。私は九十九 紫乃実。2年a組。一個上だけど全然敬語とか気にしなくていいよ！」

「あ、はい。1年c組の桐谷遙です。花里さんは同じ一年生なんだね。読書できる場所を探してるんだけどここにいてもいい？」

「も、もちろんです。」

「それにしても…C組ってことはお兄ちゃんのクラスか、あつ

まずい、ここでバレると学校中に広まる可能性が…お兄ちゃんが教師にいるなんてバレたくないのに…

「お兄ちゃん…もしかして九十九先生の事ですか？九十九先生には結構協力してもらつて、とてもありがたかったです。」

「!!でしょ！やつぱりさすがお兄ちゃん…」

「うわー、恥ずかしく。しかも後輩の前でやつぱり家族だつてバレたくないわー。思わず家族のこと語りたくなっちゃうくせなおさないとなあー

「ふふ、九十九先生の事、尊敬してるんですね。」

「そ、そななんだけど。桐谷さん。このことあんまり広げないでくれない？恥ずかしいから。」

「うん、大丈夫で：だよ。花里さんは何してたの？」

「え？えつとダンスの練習です！あ。そのダンス部とかじやないんですけど：わ、わたし…遥ちゃんみたいなアイドルになりたくて

「みのり!!!」

「ひ、ひやい！ムググ」

私は慌ててみのりの口を塞いだ。遙を見るとやはり少し顔が暗くなっていた。そりやそうよ。芸能界を引退した桐谷さんにとつて「アイドル」っていう言葉は地雷でしかない。

「ごめんなさい、桐谷さん。デリカシーにかけた発言だつたわ。」

「あっ、ううん、いいの。」

「はつきりしなさいってば!!!」

いきなり大きな声が聞こえた。遙は驚き、みのりは肩をビクツとさせていた。

「わつなに？怒鳴り声？」

「ちゃんと話すまで返さないからね！早くきなさいよ！」

「誰かがケンカしてる？ 屋上に上がつてくるみたいだけど…」

「ええ？ せっかく遥ちゃんがゆつくり出来る場所なのに。」

「今日はやけに来る人が多いな。でも、こういう日もあつてもいいかもね。 給水塔の裏でやりすごそう。みのり、桐谷さん。こつちこつち。」

給水塔の裏

## 第二話 「地雷」

屋上の給水塔の裏で隠れていると、ケンカをしていたであろう二人が屋上にやつてきた。

「あれは… 雉と…」

「愛莉ちゃん…」

「ふ、二人とも日野森先輩と桃井先輩と知り合いなんですか？」

「雉とは仕事で何回か会ったことがあるの。」

「私は愛莉ちゃんとは何回か話した事があるくらいかな。出会ったのはアイドルをやめた後だから半年前くらい。それにしてもこの学校、桐谷さんもそうだけど芸能人多すぎない。単位制クラスがあるからかな。」

「そうだね。私もそれが理由でこの学校を選んだので…」

「そ、そうですよね。桐谷さん。」

「みのり、緊張しすぎじやない？ 同級生なんだから遙つて呼んじやいなよ。私も遙つて呼ぶからさ。いいよね、遙。」

「うん。もちろん。よろしくね、みのり、紫乃実。」

「は、はい。じゃなかつた。うん、よろしくね。遥ちゃん」

みのりはとつてもうれしそうだつた。作戦成功かな。それにしても、なんで愛莉ちゃんと日野森さんが一緒にいるんだろう。一方は現役アイドル、もう一方は元アイドル。この二人の関係つて…

「……雪、わたし、昔の後輩から聞いたのよ。アンタがメンバーとうまく行つてないとか、移籍するとか、変な噂が立つてるつて事。」

「……」

「本当なの？」

「……それは……」

日野森さんはそれでも答えない。こういつた態度をずっととつていたから愛莉ちゃんは怒つているのだろう。物事はハツキリしてほしいタイプだし。

「ハツキリしなさいよ。中途半端な態度が1番良くないのよ！アンタがそんなんだと、ファンだつて不安になるじゃない。」

「わかつてる、わかつてるけど…」

それでも日野森さんは答えない。その態度を取るつてことは言つてることは本當なのだろう。でも、言つた言葉に責任を持てない、そんな感じなのだろう。ここは話が終わるまで待つて、聞かなかつたことにしよう。

「長くなりそうだね…仕方ない。こつちから出て行こうか。」

「「え?」」

「!!誰かいるの?」

「ちょ、ちょっとバレちゃつたじやない。どうするのよ遙！」

遙とみのりはスタスタと出ていく。みのりがちらりとこちらを向いたが、全力で首を振つて訴えた。「私はここで待つてると」

みのりはその想いを受け取ったのかスタスタと愛莉ちゃんと日野森さんと元へ向かつていった。

「…………」

無言で話を聞いているがなにやらややこしい話になつてしまつたが、なんとか治まりそうだ。よかつた…………。

「は、はい！わたし、アイドルになる事が夢なんです。」

「何言つてんのアンタあ！」

私はみのりのTシャツの首根っこを引っ張つて給水塔の裏まで引っ張つて行つた。

「う、うわあ、紫乃実ちゃん!?話が終わるまで出てこないんじやないの?」

「あんたねえ、よくこのメンツの前でそんなこと言えるわね。元アイドルが二人に、現役アイドルだけど悩みを抱えてる人かいるのに「アイドルになりたい」だなんて、地雷を

踏み抜くどころか地雷の上でタップダンスして、さらにブレイクダンスまでしてゐるようなものだよ？え？なんなの？体弾け飛んじゃうよ？…………あつ…………」

まずい、みのりの爆弾発言に思わず声に出して突っ込んでしまつた。隠れてるつもりだつたのに……

「紫乃実ちゃんじやない。まえ、少し話した程度だつたけど、覚えてるかしら。ところで紫乃実ちゃんははこんなところでなにしてたの？」

「え、えつと……」

どうしよう。「みのりがアイドルになるためにダンス教えてます。」なんて言えるわけない…………どうしよう。

「あ、あの、紫乃実ちゃんは私にダンスを教えてくれてるんです。また今度あるオーディションに向けて、教えてもらおうと思つてて……」

「それを1番言つてほしくないのに……」

私はため息をつきながらその後の地獄を想像するのだつた。

### 第3話 「諦めない」

「オーディションってどこに受けれるのよ。」

愛莉ちゃんはみのりに聞いた。

「え、えっと次はモリプロのオーディションを受けようと思つてます。」

「モリプロ!? 超大手事務所じゃない! あそこの倍率何倍か分かつてるわけ? アンタみたいな素人じや、通つてせいぜい一次審査よ。」

「ひ、ひょえ」

「アンタ名前は?」

「は、花里みのりです。」

「そう。今までいくつオーディション受けたことあるの? 結果は?」

「お、応募は50回くらいして書類審査に通つたのが3回で…二次審査を通つたことはまだないです。」

アイドルの審査回数は基本的に3回か4回くらいに分けられる。多いと5回くらいあるが超大手ならもつとあるかも知れない。

「そんなんじやモリプロに受かるわけないでしょ! 弱小事務所のアイドルになれるかど

うかすら…」

愛莉ちゃんは厳しいことを言うが、それは自分が苦労して いたからだろう。

「で、でも頑張ります。もつとも一つと頑張れば、きっと…！」

「頑張る？ 頑張つただけでアイドルになれるわけないじゃない。アイドルを目指すのはやめたほうがいいわ、アンタ向いてなさそ うだし。」

「そんな…」

愛莉ちゃんはハツキリと言うが、なんか愛莉ちゃんっぽくない。なんだろう、この違和感。やつぱりアイドルのことが関わると少し事情が違うのかな。

「待つて、愛莉ちゃん。」

その時、日野森さんが口を開いた。今まで辛そうな顔をして聞いているだけだったのにどうしたんだろう。

「その子の夢を否定しないであげて。愛莉ちゃんは今はお仕事をしていないけどみんなに希望を届ける、アイドルでしょ？だから、愛莉ちゃんにはそうゆうことと言つてほしくないの。」

「分かつてるわよそんなこと！……分かつてるわよ。」

「私、向いてなくとも頑張ります。」

「だからって頑張つたからってどうにかなるわけじや」

「私、信じてるんです。『今日がいい日じゃなくても、明日はいい日になるかも知れない。だからみんなが、明日こそは大丈夫って信じて頑張れるようにこのステージから、明日を頑張る希望』を届けたいんです。』……この言葉を！」

この言葉はいつもみのりが口にしている言葉……座右の銘といつても過言じやない。でもこの言葉を言つたのつて：

「だから合格するまで絶対諦めません。ダメでも頑張つてがんばつて、頑張り続けます。」

「ふふふ♪今、の言葉とつても素敵だね。」

突然何もないところから声が聞こえてくる。機械音のような音に近いけど少し懐かしさもある声だ。

「誰よ！まだ誰かいるの！」

「あれ？私のスマホが光つてる。」

みのりのスマホを見るとキラキラと虹色の光が出ていた。そこには…

「初めまして、みのりちゃん！」

「えつ？ミクちゃんの映像？」

みのりのスマホからはバーチャルシンガー初音ミクがホログラムの姿となっていた。

「それに遥ちゃん、愛莉ちゃん、凪ちゃん、紫乃実ちやんだよね。全員揃つてくれててよ

かつた！よろしくね。」

「……どうゆうこと？ どうしてミクが話しかけてきて、私たちの名前まで知つてゐるの？」  
「ふふつそれは、ワタシがみんなの想いでできたセカイから来たからだよ。」

「想いでできたセカイ……」

「そう！ わたしね、セカイのステージで、リンちゃんと一緒にアイドルとしてライブして  
るの！ リンちゃんはダンスがとっても上手なんだよ。ワタシも教えてもらつたりする  
んだ。」

「教えてもらつて……はつ」

「みのり何か思いついたの？」

「あ！ そろそろライブだから行かなくちゃ！ それじやあセカイで待つてるね。みんな早  
くきてね。」

「な、何今、新たな広告？」

「ミクちゃんとおしゃべりできるなんて不思議ね。」

「えーっと、その、いまの広告のミク。あ、広告じゃないかも？ とにかくミクが言つたこ  
とが、わたし、思いまして。」

「大丈夫？ 落ち着いて話していいのよ？」

「みのり、一回深呼吸。」

「すーーーはーーーすーーはーー、その！迷惑じゃなければですけど！先輩！私の練習を見てくられませんか？」

そこにいる全員が一瞬固まつた。

## 第四話 「練習開始！」

「なんで私達がアンタの練習を見なきやいけないのよ。」

「それは……そうなんですけど……」

「みのり……一体何を考えてるんだろう……」

「私、ダンスも歌も上手にならなくて……厚かましいことはわかつてます！先輩たちみたいな凄いアイドルに教えてもらえたなら、もつとアイドルに近づけると思つたんです。それに、入学してからずっと教えてくれてる紫乃実ちゃんにもアイドルになつて恩返ししたいんです。私もつともつとアイドルに近づけるように頑張りたいんです！だから……」

「みのり……」

「そこまで考えててくれたなんて……」

「…………わかつたわ。」

そこで声を出したのは日野森さんだつた。

「秉!?」

「みのりちゃん……だつたかしら、お仕事があるから、オフの日だけになつちやうけどそれ

でもいい?」

「も……もちろんです。ありがとうございます。」

「ちょっと、どうゆうつもり? アンタ、自分の仕事。」

「愛莉ちゃん、昔言つてたでしょ? アイドルならアイドルを目指す子は絶対に放つておかぬるものよ。つて」

「日野森さん、本当にいいの? 自分の仕事があるのに…」

「紫乃実ちゃん……だつたわね。大丈夫よ。無理はしないから。」

「はあ…わかつたわよ。私も見てあげればいいんでしょ。ただし、次のオーディションに落ちたらそこでおしまい。いい!?」

「……!! はい! ありがとうございます。」

「愛莉ちゃん…ありがとうございます。」

### 帰り道

私は屋上で少し時間を潰してから兄、一也（かずや）の車で帰ることになつた。兄が運転席、私は助手席に座つている。

「また今日も花里にダンス教えてたのか?」

「うーん、今日はね、遙ちゃんがきたよ！」

「遙……ああ、桐谷か、あの子……芸能人オーラすごいよな…」

「うーん、そうだねー」

私は空返事をする。やつぱり初音ミクが私に話しかけてきた方が気になる。「紫乃実どうした？いつもなら咲希の時みたいに興味津々に聞いてくるのに…」

「いや……うーん」

「悩みか？俺でよければ話聞こうか？兄妹だろ？」

ちようど赤信号で止まつた。兄はお茶を飲んでる。

「じゃあさ、お兄ちゃんはさ、初音ミクと話せると思う？」

「ガハツツツツゲホゲホ」

その話をするとなぜか兄は飲んでいたお茶を無理やり飲み込んでしまい、むせていた。

「わ！大丈夫！」

「そそ、そんなことあるわけないだろ？初音ミクはバーチャルシンガーだぞ？」

「そうだよねー、やっぱありえないかよねー。」

「この話はやめよう。ほら、今日の晩御飯は母さんが腕を振るってくれているらしいぞ？」

「本当？やつたー。あ！そうだ。お兄ちゃんに相談があるんだけど…」

兄は心の底から安心するのであつた。

翌日

「日野森先輩！桃井先輩！今日はよろしくお願ひします！！」

「ふふつよろしくね、みのりちゃん。力になれるように頑張るわ。」

「ストレッヂは済ませてあるでしようね？」

「はい！教えてもらう時間は全部練習に使いたいので。」

「いいねみのり、やる気満々じやん。」

「ふふん！いい心がけじゃない。……ところで、なんであそこで桐谷遙が本を読んでるわけ？」

「私が呼んだのよ。」

「紫乃実ちやんが？」

「これ見て、」

「これは……屋上使用許可証??」

「そう。今までなんとなくこの屋上を使ってたけど、使う人も増えたし、許可証を貰つておこうと思つて。」

昨日のうちに兄に相談しておいて、今日の昼に許可証を取りに行つた。

「え？ ジャあ今持つてきたマットと椅子になにか関係あるの？」

「そう。私はここにからまでに体育倉庫からマットを一枚と椅子を一脚パクつ……借りてきたのだ。

「いや、これは単に私がアクロバットをやりたいと思つたからよ。」「じゃあ関係があるのは遙ちゃんの方？」

「いや、遙には私のアクロバットの先生になつてもらうために来てもらつたの。」「まあ、アクロバットなんてすごいわね！」

「まあ、いいわ。そういうえばアンタ、自己PRと面接の対策はできてるの？」

「早速、愛莉ちゃんの熱血指導が始まつた。みのり、頑張れ！」

「じゃあ遙私たちはあつちに行きましょうか。」

「……」

私はみのりたちが練習している反対側にいた。椅子には遙が座つて私はマットでくつろいでいる。

「ねえ、紫乃実。アクロバットやらないの？ 私は静かだから問題ないけど……」

「？ アクロバットねーまあ、やつてもいいけどーまだ乗り気じやないって感じー」

気づけば夕方になり、みのりたちの練習は終わる頃だつた。

「紫乃実ちやーーん、遙ちやーん。」

「あれ？みのり、どうしたの？もう練習終わり？」

「うん！あ！そうだ。紫乃実ちゃんも今日練習してたんでしょ？ちょっと見せてほしいなあー」

「オッケー。いっくよー」

私は立ち上がり、助走をつけてロンダードからバク宙を決めた。  
むむ：少し着地ミスっちゃった。やっぱ準備運動は必要だな、反省反省。  
「わあーーーーすゞーーーい」

「ちょっと着地ミスっちゃった。ありがとう遙。おかげで上達できたよ。」

「あ、う、うん。」

遙は畳然としていたが、私の言葉でハツとしたのか返事をした。そんなにびっくりしたのかな。

「じゃあ、私もう帰るねー、じゃーねー」

私は屋上を後にした。

# 第五話 「ファミリートーク」

29 第五話「ファミリートーク」

数日後

九十九家

「なあ、紫乃実。最近帰りが遅いけど、学校で何やつてんだ？」

唐突に2番目の兄である仁剛（にごう）が突然聞いてきた。

「ん？ あー、友達がね、アイドルになりたいっていうからその練習をしてる♪」「へえー、お前が教えてんのか？」

「前まではそうちだつたんだけど今は元アイドルの子とか、現役アイドルの子とかが教えるんだよ。」「元アイドルと現役アイドル!? なんで急にそんな豪華なんだ? で? 誰なんだ? 僕でも知つてるか?」

「桃井愛莉と日野森雲よ。超有名アイドルだから知つてるんじゃない?」

「え? 日野森雲! ? 超有名アイドルじやん、すごいな。あと…桃井…

「桃井愛莉、結構前にバラエティ番組によく出てたでしょ? ピンク髪の」「あーー、あれ? 桃井愛莉つてバラエティタレントじやなかつたのか?」

「愛莉ちゃんはアイドルだよ。全く本人が聞いたら…………!!」

「あ……わかつたかもしない。愛莉ちゃんがアイドルを辞めた理由。いや、あくまで予想だし……」

「最近アイドル業界物騒だよなあ、桐谷遙も引退しちゃつたし。」

「あー、遙ちゃんね。遙ちゃんもよく一緒にいるよ。レッスンをしてはいないけど一緒に話したりしてるよ。基本的に本を読んでる事が多いかな。あ、後一也兄さんのクラスなんだって」

「は？ 宮女つて桐谷遙までいるのかよ？ アイドル3人が集まっている場所になんでお前居れるんだよ。」

「私もまだ驚いてるよ……。」

話していると私たちの隣の扉が開いた。

「ちよつと、なんの話？ 私の部屋の前でうるさいんだけど……」

扉から出てきたのは姉である愛美（あいみ）だった。

「あ……お姉ちゃん……ごめん。ちよつとアイドルの話してたの。」

思わず目を逸らしてしまう。やつぱり顔を合わせると少し気まずい。ご飯食べる時とかならないけれど対面するとちよつと違う。

「？、なんでそんなに申し訳なさそうなの、別にそこまで怒つてないわよ？ んで？ アイド

ルがなんだつて?」

「いやほら、最近桐谷遙が引退したじゃん?」

「へえー」

「しらねえのかよ。」

「興味ないし」

「それで、最近アイドル業界が物騒だなって話よ。俺が思うに、もう一つ事件が起きそうな気がするんだよ……」

「え? なになに? 事件?」

事件という言葉が出ると弟の優吾が話に割り込んできた。

「お前は事件つていう言葉だけで反応してくるな! 話がややこしくなるだろ!」

「え? 紫乃実姉ちゃんの友達が日野森零と桃井愛莉と桐谷遙の超豪華メンツで、そのうち二人が紫乃実姉ちゃんの友達のアイドル志望の子に教えてる。で、そこからアイドル業界を震撼させる事件がもう一つありそうって話でしょ?」

「なんで状況を完全に理解してんだよ。まあ。そんなもんよ。」

「もく、現役アイドルの子もいるのにそんな物騒な事言わないでよ~」

「そもそもか。まあ、あくまで予想だから気にはすんな」

「正直日野森さんが一番怪しいけど……大丈夫だよね……」

数日後

屋上にはわたし、みのり、愛莉ちゃんがいた。

遙は日直、日野森さんは仕事のようだ。

みのりと愛莉は練習が終わり、何やら話しているようだ。

「二人ともなんの話してるの？」

「そうだわ、紫乃実。今日雫見てない？」

「今日？うーん、見てないかな。最近こないから仕事が忙しいと思つてたけど……なんか用事？」

愛莉ちゃんはしばらく黙つてから口を開いた。

「わたし、この前雫に酷いこと言つちゃつたの。雫は私のこと心配してくれたのに、私は雫に『生まれもつてるアイドルだつて認められるくせに』なんて言つちゃつて……だから雫に謝りたくつて……」

「ど、どうしてそんなこと言つちやつたんですか？」

「きっと本当は羨ましかつたと思うわ。私と雫は事務所の同期なんだけど、雫は昔から私にないものをたくさん持つてたの。初めて雫に会つた時はびっくりしちゃつたわ。もちろんすごくキレイつたいうのもあるけど、キラキラしてるっていうか……自然と目

で追つちゃって……これが天性のアイドルなのねって、圧倒されたわ。もちろん、負けない！って思つたけどね。それからデビューまで一緒に頑張つてきた。辛いこともあつたけど、励まし合つて乗り越えて……でも、私はアイドル扱いされなかなつしていくのに、零はどんどん先に進んでいつて……私も零みたいだつたらつて思もつたら。本当最悪よね。」

「愛莉ちゃん…」

私もお姉ちゃんと一緒に練習してた時、そんなこと思われてたのかな…

だめだだめだ。そんなこと考えてちゃ。今は愛莉ちゃんと達を仲直りさせないと！

「桃井先輩……じゃあちゃんと謝りに行きましょう。今から日野森先輩に会いに行きませんか？」

「そうだよ。わたし、二人の仲が悪いままのは嫌だな、私たちも手伝うから、日野森さんを探しに行こう？」

「二人とも…ありがとう…」

その時、私とみのりがつけているニュースアプリの通知がなつた。

そこには…

「愛莉ちゃん（桃井先輩）大変（です。）これ!!」

と振り返った時、私はみのりとぶつかり、みのりだけ倒れてしまつた。

「二人とも大丈夫!?」

「ごめんみのり。 大丈夫?」

「うん、大丈夫!」

「二人ともどうしたの? そんなに慌てて。」

「それが……」

私はスマホの画面を見せた。その記事を見て愛莉ちゃんは走り出した。

そこには

『人気グループ cheerf u l \* D a y s のセンターとして活躍していた日野森雲が同グループを脱退、事務所も退所していく事が判明した。』

との記載があつた。

## 第六話 「問い合わせ」

走り出した愛莉ちゃんは人の波をかき分けていく。愛莉ちゃんはどんどんと進んでいくがなかなか追いつかない。

走つていく途中で遙とすれ違つた。急いでいた私は要件だけを伝える。

「ごめん遙、状況は後ろのみのりから聞いて！私は愛莉ちゃんを追いかけるから！」

「え？ ちょっと…………みのり：いないけど」

後ろにいたはずのみのりがいなくなつてていることに気づかなかつた私は迷わず愛莉ちゃんを追いかける。

私はまだまだ走つていく。ついに中庭に出て愛莉ちゃんの背中が10センチに近づいたところで手を伸ばし、愛莉ちゃんを捕まえた。それと同時に目の前に帰り際の日野森さんもいた。

「愛莉ちゃん！ やつと追いついた。あ、日野森さん……」

「待ちなさい！ 霧。」

「愛莉ちゃん、紫乃実ちゃん……」

「やつぱり、cheerful\*Daysを脱退するつて噂は本当だつたのね。でもど

うして?」

「……」

「なんで黙るのよ。ちゃんと話してよ、雲」

「愛莉ちゃん、一回落ち着いて。日野森さん、ゆつくりでいいから教えてくれない?わたしは最近知り合つたばかりだけど、もう友達でしょ?」

「……」

それでも日野森さんは話してくれない。

そこに、後ろにいたみのりとさつきすれ違つた遙がきた。

「日野森先輩!あの……本当にやめちゃつたんですか?」

「もう少し…伏せてもらえるはずだつたんだけど…」

「本当なんだね……」

「どうして?どうしてよ!雲がアイドルを辞める理由なんてどこにも無いじゃない!雲は……うらやましいくらいアイドルじゃない!華があつて…立つてるだけで存在感があつて。みんなが振り返るくらいキレイで」

日野森さんは涙ぐんでいた。嗚咽を飲み、言葉を発した。

「どうして愛莉ちゃんまでそんなこと言うの!?愛莉ちゃんが教えてくれたんじゃない。大事なのはハートだつて。ファンに希望をあげるために頑張るのがアイドルだつて。

だから私はずっと、そんなアイドルになろうと思つて頑張ってきた、なのに……なのにどうしてみんな、私の生まれ持つたもののことばかり言つて責めるの？」

そうか、日野森さんはルツクスや元の才能を見るんじやなくて一人のアイドル、日野森零を見て欲しかつだつてことだつたのね。唯一、見てくれていた愛莉ちゃんにそれを否定されたら……

「もしかして、私のせいなの？私が零にあんなことを言つたから……」

「それは……でも、辞めることははずつと考えていたの。みんなどうまくいかなくなつてからずつと」

『みんな』つて cheerful\*Daysのメンバーのこと？メンバーが人気のある零を妬んでいたつて本当だつたの？」

「…………初めは違つたわ：」

そこから日野森さんは cheerful\*Daysで起こつたことを話し始めた。  
もう、私はアイドルが好きかもわからなくなつちゃつたの。」

こんなのがアイドル？私が夢見たのはこんなアイドルじや……ううん、私はアイドルを目指さないつて決めたの。そうだよな、アイドルでも中身は人間。妬んだりするのも普通だつて。

「私の、せいた。希望をあげるだなんて言つて、私は……逆のことをして……私が零から

アイドルを……そんのはいや、零は本物のアイドルなのに……私とは違う……零は……だから、零がステージから落ちるなんて嫌！」

そうゆうと愛莉ちゃんは走り出した。今度は学校の外に向かって。

私は走り出した愛莉ちゃんの後を追いかけた。

愛莉は学校の外に出て走っていると赤信号に捕まつた。仕方なく立ち止まつた愛莉ちゃんに私は話しかける。

「愛莉ちゃん、どこにいくつもり？」

「……cheerful\*Daysの劇場よ……零のことについて直談判しに行くの。」

## 第七話 「今までありがとう」

「愛莉ちゃん、どこに行くつもり？」

「……cheerful \* Days の劇場よ。雪のことについて直談判しに行くの。」

「そつか、じゃあ私も行く。」

「えつ？」

「愛莉ちゃんは日野森さんがアイドルを辞めてほしくないんでしょう？ だったら私も同じことを思ってる。」

青信号になつて走つても私は愛莉に話し続ける。

「それにもう二人とも友達だから。二人にはずっと仲良くしてほしいし、友達を傷つける人は許せない。」

「紫乃実さん……」

その言葉を聞いて愛莉ちゃんは立ち止まつた。

「ありがとう。よーーっし、できるか分からないけど、やれるだけのことはやりましょ  
う。改めてよろしくね。紫乃実。」

「うんよろしくね。愛莉」

私達はcheerful\*Daysの劇場に走つて行つた。

cheerful\*Days 劇場

私が劇場に着くと cheerful\*Daysのメンバー達は日野森さんの悪口を言っていた。テレビともライブとも違う、キラキラもしていない。そこにはアイドルなんかではなく、ただの人間だった。

「アンタ達！」

「え……愛莉？なんで愛莉がここにいるわけ？それで隣のあなたも誰？」

「雪のことでの話をしにきたの。」  
その言葉にわたしは少し怖くなつた。言葉はとても冷たく、威圧感があつた。

「ああ、そのこと？ 愛莉と零は仲良かつたもんね。でも、事務所と揉めて出て行つて人は関係ないでしょ？」

『そのこと?』自分のグループのセンターがいなくなつて悲しくないつてことですか?

「なに？ 私達は愛莉に質問してるの。ちょっと黙つてくれない？」

「二つ」

すると後ろから日野森さんとみのり、そして遙がやつてきた。おそらく追いかけてき

たのだろう。

「ありがとう紫乃実。私に任せて。そうね、私は逃げた。私はアイドルとして活躍できないことがイヤで逃げて、そこでもアイドルとして見てもらえないで逃げたわ。本当はもつともつと頑張つて理想のアイドルに近づかなきや行けなかつたのにね。……でも、零は違うわ！零はセンターとしてずつとがんばつてた！アンタ達と一緒にファンに希望を届ける為にがんばつてた！だから！」

「だから何？辞めたのは零の意思でしょ？私たちになんの関係があるの？」

「私達別にあの子にやめろなんて言つてないし。それにさあ、零ならアイドルやめたつてモデル事務所とかが拾つてくれるんじやないの？」

「本当、見た目がいいって得だよね。こつちは必死で頑張つてるのに。」

容赦ない言葉が愛莉と日野森さんを襲う。

「アンタ達の気持ち、わかっちゃうのが本当にイヤ…そうよ。私もアンタ達みたいに羨ましかつた！零は華があつて綺麗で特別で自分が頑張つてゐるのにどうして零ばっかりつて思つちゃうこともあつた。でも……でも、ちゃんと見なさいよ。零は自分の才能にあぐらをかかなかつた。みんなが期待したらそれに応えようつて努力した。アイドルとしてファンに希望を届けようとしたわ！だから人気があるの！だからセンターにいるの！妬んで、ふてくされてるだけの私たちとは全然違うのよ！」

「そんな事ない！」

「紫乃実ちゃん？」

「紫乃実ちゃん？」

「愛莉は最後まで零を追い越そうとしてた。でもこの人達は違う。あなた達、零に変わつてセンターになろうとか考えた事ある？ないでしようね。アンタらは零の悪口を言つてる時点で既に諦めてるのよ。諦めたやつの努力なんて努力じやない。だから愛莉。愛莉はこの人達とは違う本当のアイドルだよ。愛莉は零に酷いこと言つちやつたかも知れないけど、二人なら仲直り出来るはずだよ。」

「ありがとう紫乃実。そしてごめんなさい零。」

愛莉は零に頭を下げた。その目には涙が浮かんでいた。もちろん言葉を受け取った零にも。

「私最低だつた。自分のことばっかりで零を傷つけて、零はずつと私の言葉を信じて、みんなに希望を与える為に、ずっとずっと頑張つてたのに」

「ありがとう、愛莉ちゃん。さつき言つてくれてこと。私とつても嬉しかつた。今までアイドルをやつてて1番嬉しかつたやつぱり愛莉ちゃんは私のアイドルだよ。」

「てゆうかなんでまた零がここに来るの？アンタのせいで仕事の予定もグチャグチャなのによく顔出せたね。」

「愛莉に泣きついて文句言いにきたわけ？そうゆうたことがムカつくんだよね。」

「あーあ。本当に零がいなくなってくれてよかつた。」

cheerful\*Daysのメンバーは零に対してまだ心無い言葉をかける。

「零、気にしちゃダメだよ。零の選択は間違つてないから。」

「ありがとう。紫乃実ちゃん。名前で呼んでくれて嬉しいわ。」

「あっ…その…夢中だったから…」

私は頬を赤らめ、零は私にニコッとわたしに笑いかけた。

心無い言葉を言われても零は落ち着いていた。だが…

「…アンタ達…」

「あっ！」

「愛莉!!」

その言葉に触発され、愛莉がメンバー側に走つて行こうとした時、

「桃井先輩、ダメ！」

今まで見ているだけだつたみのりが愛莉の前に両手を広げ立ちはだかつた。

「ダメです。桃井先輩!! 桃井先輩は『アイドル』なんですよ!! アイドルはみんなに希望を

与える存在なんですよ！」

「はあ？ 愛莉はとつぐの昔にアイドルを辞めて…」

「ありがとう、みのり。頭に血が昇っていたわ。アイドルは——こんなことしちゃダメよね。」

「よ、良かつたあ。」

「よく止めたねみのり。さ、こんなところ帰りましょ。零、何か言わなくていいの？」

「少し、先に行つて欲しいわ。」

「分かつた。みんな行こつか。」

私達が劇場から出て少し経つて零が出てきた。

「言いたいこと言えた？」

「ええ、ありがとう。みんな」

その零の笑顔はとても綺麗だった。

## 第八話 「亀裂」

紫乃実 side

私達は劇場から帰る帰り道、周りはすっかり夕方になつていた。

「悪かつたわね、みのり、遥。こんなことに付き合わせちゃつて。」

「いえ、大丈夫です。誰も怪我しなくてよかったです。」

「紫乃実ちゃんありがとうね。」

「ううん、わたしは自分の意思での場所に行つたから。」

「重ごめん。わたし、自分のことだけしか考えてなかつた。許してなんて言えない。でも、本当にごめんなさい。」

愛莉は再び謝つた。

「愛莉ちゃん……ねえ愛莉ちゃんにひとつ、お願ひしてもいい？ 私、愛莉ちゃんにもう一度アイドルをやつて欲しいな。」

「え？」

「さつきね、すごく嬉しかつた。わたしのことをちゃんと見てくれる人がいるたんだつて。あの一言で本当にたくさんの希望をもらえたの。」

「でも、」

「愛莉ちゃんは今も昔もアイドルでしょ？辛い時に支えになる言葉をくれたのも、それに”本当のアイドルになる夢”を教えてくれたのも、全部愛莉ちゃんだった」  
　　”本当のアイドルになる夢”わたしはその言葉を聞いた時胸が苦しくなった。だんだんと意識が薄くなつてていく。動悸と呼吸が止まらない。これやばい……

卷之三

みのり side

わたしは今、歴史的な瞬間に立ち会っています。なんとなんとあの、日野森零ちゃん  
と桃井愛莉ちゃんがアイドルグループを組もうという瞬間に今わたしはいます。

「よかつた。桃井先輩も、日野森先輩も……」

「ふふつ、愛莉ちゃんとアイドルができるなんて夢見たい。」

「そうね！ やるからには、世界で1番、ファンに希望を届けれられるアイドルになるわよ！」

うん！」

はわわ～本当にこと二人がアイドルグループを組むなんて！すごいよ、すごすぎるよ

「どこの事務所に入るとか、二人でどうやつて活動するとか、ゆくゆくは具体的なことも考えなくちゃいけないけど……まずは一人で練習から、かしらね。ねえ、零。明日から屋上で練習しない？」

「え!? 本当ですか?」

「それはとつても素敵ね。お邪魔じやないかしら? みのりちゃん」

「だつ大歓迎です。よろしくお願ひします!」

「遙。その、アンタもたまにはやらない? 正直に言うと教えてもらいたいのよ。ASR UNの時から見てたけど、歌もダンスもズバ抜けてたし。わたし、1日でも早く感を取り戻したいから。」

も、もしかして、遙ちゃんまで!? そ、そんなあわたしどうなつちやうの(

「ごめんなさい、わたしはいいです。」

え? 遥ちゃんどうして……

「わたしからもお願ひよ。遙ちゃんが教えてくれたらきつと……」

「やめて! わたしはアイドルをやる資格がないの!」

え? 資格がないってどうゆうこと? 遥ちゃんが?

「アイドルをやる資格がない? それってどうゆうこと?」

「……いえ、深い意味はないです。ただ、言い間違えただけでわたしのことは気にしない

「でわたしは今、学生として普通の生活を送りたいの。3人とも頑張って応援してる。」

うう…遙ちゃんには断られちゃつたけど紫乃実ちゃんなら…あれ?

「紫乃実なら…つてあれ？ 紫乃実は？」

桃井先輩も紫乃実ちやんがいなないことに気がついたようだ。ずっと後ろにいると

思つてたのに：

一  
紫乃実！

遥ちゃんは紫乃実ちゃんをみつけたのか、後ろに走り出した。

紫乃実 side

「…………のみ！！…………紫乃実！」

わたしは遙に大声で呼ばれ、気がついた。まだ頭がフラフラする。

な…なに? 通? どうしたの?」

一紫乃実ちゃん！

さらにみのりも走ってきた。後ろからは愛莉と零もいる。

「紫乃実、大丈夫？え？アンタ顔色真つ青じやない！」

「え？ ああ、大丈夫大丈夫。」

「びよ、病院に行かないと……」

「病院？だめ、迷惑かかつちやう。家…近い。これ、住所」

私は住所の書いてあるケータイのメモを見せた。今なら家に誰もいないし、迷惑かからない。

「わ、分かつたわ。ここに連れて行けばいいのね。  
分かつたわ。じゃあ道案内をお願い。」

みのり S i d e

九十九家前

「ここね。それにしても、誰かいるのかしら。」「はい、誰かいるといいんですけど…」

「はい、誰かいるといいんですけど…」

見たところ誰もいる気配がない。紫乃実ちやんも寝たまんまだし、どうしたら……

「あの…うちの前で何やつてるんですか?」

話しかけられた方を見ると杖を持つた少女がいたが、顔立ちはどこかで見たような

三  
つ  
て

「えええええ～～～～、紫乃実ちゃんがもう1人～～～～！？」

# 第九話 「九十九家上陸」

九十九家

みのり side

「こつちが紫乃実の部屋です。あの、妹を運んでくれてありがとうございます。あ、お茶でも飲んでいいでください。」

紫乃実ちゃんのお姉さんは私たちをリビングに案内してくれた。

私達は軽く自己紹介し、お姉さんの名前は愛美さん、というらしい

「一也兄さんには連絡したから、荷物とかは直接持つててくれるみたい。」

「あ！ そういうえば荷物とかを屋上に置きっぱなしだった！」

「あ、ありがとうございました。」

「い、いえ、こちらこそ」

う、うわくん。囁んじやつた。恥ずかしく

「あ、あの！ お姉さん！ 紫乃実ちゃんのこともつと教えてくれませんか？」

「紫乃実のこと？」

「は、はい。紫乃実ちゃんってあんまり自分のことを話さないし、たまにすごく悲しそう

な目をしてるので…なんでかなつて気になつてしまつて…」

「みのり…確かにそうね。わたしも紫乃実の昔のことを知りたいです。」

遥ちゃんもそう言つてくれた。そうすると紫乃実ちゃんのお姉さんは話し始めた。

「紫乃実のことか…そうですね…みんなはアイドルを目指してるんだつたよね。紫乃実から聞いてるよ。うーん、この話結構長くなりそうだけど大丈夫?」

「はい！大丈夫です。」

「じゃあ話すね。私と紫乃実は、中学まで『完璧姉妹』つて言われていたの。自分で言うのも恥ずかしいけどね。勉強も、運動もできてすごいね～ってよく言われたわ。」

確かに、紫乃実ちゃんは勉強は…あまり知らないけど、運動はすぐできるよね。小さい頃からそうだつたんだ…

「でもね、その話には裏があつて、ひとことでいつちやえば紫乃実は天才タイプ、私は努力家タイプだったわけよ。で、わたしは紫乃実に追いつこうとして必死に努力したわけ、そうしたらね、ある日紫乃実が「アイドルになりたい」つて言い出したのよ。そこからの紫乃実はすごかつたた、すぐに面接関係の資料とかも書いてダンスの振りもすぐ覚えて、やっぱりうちの妹は天才だつて思つたね。」

紫乃実ちゃんもアイドルを目指してた時期があつたんだ…でもなんで…

「で、いざオーディションつてときにわたしが倒れちゃつたの。そつからわたしが目が

覚めて、気づいたら紫乃実はアイドルを目指すのを辞めてた。だから皆さん、紫乃実と一緒にアイドルをしてくれませんか。妹の夢を叶えてくれませんか？」

愛美さんの訴えにしばらく沈黙が続いた。すると……

「おい、愛美。誰かお客様でもきてるのか？あらかじめ言つておくとかし……ろ」  
リビングには突然帽子を被つた、ゆうに180を超える大男がリビングに入ってきた。  
た。

「つて！桐谷遙に日野森雲！桃井愛莉まで！？うわ～握手してください。」

そう言つて、私以外の3人と自己紹介と握手をした後その大男は私の前に手を差し出した。

「紫乃実の兄、九十九仁剛です。紫乃実の友達だよね。よろしく」

「はい、花里みのりです。よろしくお願ひします。」

よし、今度は瞞まずにいえた。仁剛さんは私のことをじつと見ていた：

「うん、紫乃実言つてたアイドル志望の子だよね。君なら絶対なれるはずだよ、頑張つてね！」

「はい！ありがとうございます。」

仁剛さんは手を離すと愛美さんの方を向いた。  
「なんの話してたんだ？」

「なんでもないわよ、紫乃実の昔話くらいかな。」

「へえー、そう。なら興味ねえわ。あ！兄貴がもう少しで着くって連絡きてたぞ。4人とも今日は本当にありがとう。」

「紫乃実ちゃんにはいつもお世話になつてるので」

と、私が言うと

「友達のためですから」

「紫乃実には今日助けてもらつたので」

「ええ、愛莉ちゃんの言う通りです。」

さらに、遙ちゃん、桃井先輩、日野森先輩が続く、

そのあとは他愛もない話をして、九十九先生が来るまで愛美さんと仁剛さんと話して、九十九先生が来てからはありがたいことに車で家に送つてもらつた。

それにしても、愛美さんの言つた言葉…

『妹の夢を叶えてくれませんか。』

どうしたらいいんだろうか…それに遙ちゃんのこと…考へることいっぱいだよ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

それから紫乃実ちゃんが屋上に姿を現すことはなかつた。

# 第十話 「セカイと青」

紫乃実 side

私は学校をサボっていた。もうサボり始めて3日目、なんのやる気もなく寝て起きてを繰り返していた。もう何にもやる気がない、もう一回寝よ…………：

私は目が覚めるととても騒がしかつた。大きな声が途方もなく聞こえる。まるでライブ前みたいだ…あれ？ 私ってライブ来てたつけ？

「あ！ ミクちゃーん起きたみたいだよ。」

「わ！ ほんとだ。目が覚めてよかつたよ。」

「うわっ！ だつ 誰！」

目の前には緑髪のツインテ少女と、黄色髪と頭に特徴的な力キューシャをつけた少女だつた。おそらく初音ミクと鏡音リン。だがその服装はまるでアイドルのようだつた。

「私？ 私達は～紫乃実ちゃん達の想いから生まれたんだ。」

「想い？」

「そう！ 紫乃実ちゃん達には、本当の想いをみつけてもらいたいの。」

「私の本当の想い？」

「うん、紫乃実ちゃんはまだ心の中にしまったままみたいだけど：大丈夫だよ。なんてつたつて紫乃実ちゃんには仲間がいるからね。」

「仲間：多分みのり達のことかな？無理だよ。彼女達は本当のアイドルになるんだから：私が仲間だなんて：無理だよ。私にはそのステージにすらたてない。」

「うーん、あ！そうだ。じゃあステージに立つてみようよ！今からライブが始まるし、ね？」

「それ、とーーつても素敵なアイデアだよ。さすがミクちゃん。」

「ふふ、ありがとう。じゃあ行こつか、」

突然、初音ミクと鏡音リンに腕も引っ張られ、ステージに向かっていく。

「え？·ちょっと、ステージ行つて何するの？セトリは？パフォーマンスは？何すればいいの？」

このあとめちゃくちゃ楽しんだ。（ただ手拍子してるだけ）

ライブが終わりそうになると観客の持っているペンライトが青色に光りまるで海のようだつた。これつて：・

「ASRUN時代の遙のソロ曲演出…」

と、私は確信できた。懐かしいけどもう見ることはできない：・

「綺麗だよね、ライブが終わると、たまーにペンライトが青く光るの、誰かの想いがそうしてるんだと思つてるよ。」

「ありがとう。多分遙じやないかな。ミク、リン。貴重な体験をありがとう。」「あれ？ 私たちつて自己紹介したつけ？」

「2人は超有名人でしょ？ すこし姿が変わったくらいじゃあ、私でもわかるよ。そういうえば、ここつてどうやつたら出れるの？」

「スマホの中の『untitled』って言う曲の再生を止めれば戻れるよ。」「そつか、じゃあね。今日はありがとう。」

「え～もうかえっちゃうの～」

「リンちゃん大丈夫だよ。また会えるはずだから。またね、紫乃実ちゃん。ここにはまた『untitled』を再生するとこれるから」

「うん、またね。また…ライブ見にくるよ。」

明日もまた……ううん、明日は学校行こ。

～～～～～～～～～～～～

次の日

学校

私が倒れてから4日間来なかつたことからみんなにたくさん心配された。でも、屋上

には行けない、やつぱり私はアイドルには…

「あ……」

「あ……」

私と遥は運命のいたずらのようにばつたりとあつた。

「紫乃実、久しぶり。体は大丈夫？」

「遥……ええ、4日間も休んだからね、ばつちり……」

「……」

「……」

すこし会話に間が空いてしまう。

「遥は屋上に行くの？」

「ううん、今日はもう帰るつもり。」

「私ももう帰るつもりだつたんだけど……じゃあさ……」

私と遥は学校を出て、ショッピングモールと足を進めていった。

そこから私たちは服を見たり、映画を見たり少し食べ歩きをしたりして私たちはフアミレスにいた。

「ねえ、紫乃実。紫乃実の夢つて何?」

私たちはそれまで他愛のない話をしていたが急に遙は真剣な顔になり出した。

「どうしたの急に、私の夢? それはね……家族みんなに幸せになつてもらうことだよ。私は何よりも家族が大事、お兄ちゃん達もお姉ちゃんも弟も、みんな夢を追いかけてる。だからその夢が叶つたらとっても嬉しいから、それが私の夢。」

「……! それは……本当の……」

遙は私の嘘を分かつているのか分からないが遙の反応を無視して私は逆に遙かに質問する。

「じゃあ私からも質問、遙がアイドルをしてた時、1番楽しかった瞬間は?」

そこからはお互いが質問をして、質問に答えるを繰り返していた。お互いが5個質問をしたところで私はある質問をした。

「じゃあ、遙……ううん、私が倒れたあの日いたメンバーは私の夢について知ってる?」「…………知ってるよ。愛美さんが話してくれたの。」

「そつか、お姉ちゃんが……」

「紫乃実。アイドル、やつてみたら? 辞めた私がいうのはなんだけど紫乃実は向いてると思うよ? 運動神経もいいしさ」

「…………遙には分からないよ。教えてもらつたんでしょう? 私がアイドルを目指したか

ら、お姉ちゃんは体を壊したの。お姉ちゃんは私よりももつとすごかつた。将来、いくつもの功績を残してたかもしれない、そんな未来がある人間を私は……」

「紫乃実……」

「私のやつたことは人殺しと一緒によ。未来のある人間を殺して：そんなやつはアイドルになんかなれない。遙には分かんないよ。」

私はそう言つた。これで諦めてくれるだろう。人殺しがアイドルなんてやつちやいけない。

「……分かるよ。しのみの気持ち…」

「え？」

「なんで？ 遥が？」

「2年くらい前かな？ ASRUNに真衣つて子が入ってきたでしょ？」

「うん、辞めちゃつたけど結構好きだつたんだよね：あの時は残念だつたな。」

数年前、新メンバーと来て入つてきた真衣ちゃんはメキメキと実力を発揮し出たが、怪我でグループを脱退してしまつた。今は足取りが掴めないけど芸能活動は続けてい ると願いたい。

「真衣が怪我したのは私のせいなの。 ……」

そこから遙はASRUNにいた時のこと話を話し出した。真衣ちゃんがスランプになつても練習し続けて喉を壊した。それは自分のせいでそんな私が希望を届けられるわけがないと、それでついにはステージに立たなくなつてしまつたと……

分かつた?これが私、桐谷遙のアイドル人生の最期。

「……………真衣ちゃんとは仲直りできたの?」

「うん、とは言つてもつい昨日の事だけどね。」

「そつか……」

「変な空気になつちやつたね、もう帰ろつか、」

「うん、また明日ね」

会計を済ませ、別々の方向に向かう私たちは背を向けて歩き出した。

# 第十一話 「作戦会議」

みのり side

私は急いで屋上の階段を駆け上がる。絶対成功させるんだ：ライブを！

「ハア、ハア、ハアおはようございます！」

「お、おはようみのりちゃん。どうしたの？ そんなに息を切らせて」

「ライブやるなら体力つけなきやと思つて10キロ走つてきました！」

「急に張り切り出してどうした訳？ 昨日はあんなにへこんでたのに…つていうかライブ？」

「私遙ちゃんのためにライブをやろうと思うんです！」

それから私はライブをやろうと思つた経緯や、自分の考えを愛莉先輩や日野森先輩に話した。

青いペンライトの海みたいな景色……。それが遙ちゃんにとつて、大切な思い出の景色なのね。」

「はい。その景色は世界のステージでライブをやれば見せられると思うんです。だから私、セカイでライブをやろうと思うんです！ それで遙ちゃんが少しでも元気になつてくれ

れば

「でも、その景色つてステージの上から見ないと意味ないのよね？景色を見てもらうためにはステージに上がってもらわなきやいけないけど、遥はステージに上がらないわけで……そこはどうするつもりなの？」

「それに……アイドル時代に見た大切な景色なら見たら余計に辛くなってしまうかもしけないわね……」

「それは……そうですけど……でも、今の遥ちゃんは明日はきっといい日になるつて、もう信じられなくなつちやつていて、そんなふうに前を見て進めなくなつちやうことは、すつごくすつごく辛いことだと思うんです。」だからせめて遥ちゃんが少しでも前を向いて進めるようにあの景色を見てもらいたい。あの光は全部遥ちゃんに希望をもらつた人たちの想いの光なんです！だからきつと届きます！『たとえアイドルを辞めたとしても遙ちゃんには前を向いて進んで欲しい』っていう想いが！遙ちゃんをステージに呼ぶ方法はまだ考てる途中ですけど……でも、考てるだけじゃ、私も遙ちゃんもずっと止まつたままだから、たとえ一回のライブでも遙ちゃんの心を動かさなくても遙ちゃんが前を向けるようになるまで何度もライブします。

「みのりちゃん……」

「それって結局ノープランつてことじゃない……ほんとみのりつて最初からそうだったわ

ね。無茶なことばつか言うつていうか、無鉄砲つていうか」

「ふふ、そんなこと言つてるけど、愛莉ちゃんはもう答えを出しているんでしょ？」

「まあね、零のとこの劇場に飛び込んで行つた私がとやかく言えないもの。だから……みのり、私たちにもそのライブをやらせてくれない？」

「ええ、私たちも手伝わせて欲しいわ、渡したにも遙ちゃんを励ましたくてどうすればいいか悩んでいた所だつたのよ。：私は愛莉ちゃんが私のために行動してくれたから、また前を向けるようになつたわ。だから遙ちゃんのことをいっぱい考えてるみのりちゃんとなら、遙ちゃんを励ませるかもしけないって思うの。」

「それに、みのりみたいな頑張り屋、応援しやきや、アイドルが廃るもの。」

「ありがとうございます！桃井先輩！日野森先輩！」

「ただし！一つ条件があるわ！」

「ひや、ひやい！なんでしょうか！」

「ライブには紫乃実も連れてきましょう。」

「え？紫乃実ちやんもですか？でも今は体調不良で休んでるんじや……」

「いいえ、紫乃実ちやんは昨日から学校に来ているわ、でも……」

「二日もここに来ないつて言うことは……紫乃実はもう私たちと関わる気がないつてことかもしれないわ。」

「そ、そんなあ」

「愛美さんの話を聞いて、私はアイドルとして、いいえ、友達として黙つていられないわ。それに紫乃実はまだ夢を諦めていないと思うの、だからこのライブの目的は二つ、一つは遥を前を向いてもらうこと。そして、紫乃実の夢をもう一度見つけさせることよ。」「でも……愛莉ちゃん、どうやつて紫乃実ちゃんを説得するの？」

「そこは任せなさい。その作戦はもう考えてあるわ。」

そのあとは愛莉ちゃんの作戦を聞いたあと、セカイに行つて練習をし、本物のアイドルから受ける指導は厳しかった。けど絶対ライブを成功させるんだ！